

当 今 学 会 開 催 の う ら ば な し

鈴 木 康 治

過日（89.9.14、15、16の三日間）、日本宗教学会の第48回学術大会を、わが獨協大学で行なった。大過なきは同慶の至りとも云うべきだったろう。その意味で、指摘さるべきミスは、むしろ語るべきではなかろう。何故なら学会は既に終って済んでおり、今更だったからである。終ったことで喜ぶべきこと（それは疲れと悲哀感を呼びますが）に他ならない。

そもそも話の始まりは、当時の脇本学会会長からの電話だった。遠慮がちの脇さん（われわれはこう呼んでいた。筆者が在学時の助手である。三高出身の善人、話しのよく聞いてくれる助手であった。御本人の弁明もおありでしょうから研究室事情は他日を期したい。ま、東大宗教学科の助手史があつてもよかったです）の意図はもう分っている。それに当方にも前科があるので、ノーは、男としても、立場上（教養部長在任のうねぼれ）からも云えなかった。勿論、何とかするのであるが、既に松本皓一君（同級生であり、駒沢大学教授、仏教学部長在任）がやっている。学会長の立場が、職責上、次回開催校選びにあって苦慮の一つであることが分っているだけに、脇さんの顔は潰せないのである。当方に話をもちよるのは（まだ何とも云つてなかつたが、ピーンと来るのである）、御腐心のはてであろうと。

してみると、見込まれた当方の諸般の事情を考慮されてのこととは、以心伝心、分るのである。

何とかやりますという言葉の裏側に、学内協力の強引なとりつけ、更に当時出来つつあった二大協（獨協学園内の親睦、交流含みの協議体のこと。同じ学園内でも、全く関わりなくあつたための）の存在から、学園内の各位の御協力も期待しうると。具体的には、二大協の裏方を務められた吉村教授（医大、第一内科教授、次期学長予定者であられる）の温情に接し、心惹かれるものがあ

り、各位のなにがしかの御協力をえられようとの予感もあったに相違ない。

それに、とかく狭量になりがち（それは下手をすると野郎自大ともなりがちの。世間一般では、一国一城の主と言うが）なのに比して、開けた眼をもつ大久保教授（経営学担当）があった。彼のゼミ学生掌握の実態は、二大協会合に当つて、又、当方にとつても期するものを持たしめたのである。

素より、学内にもそれぞれ有能な方々があり、多士とは云えても、学会が学会だけに、直接御協力をと云う訳には行かぬ。学問の次元を異にする以上、妙なあては自戒すべきであり、助言求めにとどめたのである。

己れの近辺では、かの所澤教授（数学担当、逝去時教養部長であった）の御逝去後、とかく仲間にても異和感が生じ（それらには今は触れまい）、中傷・足のひっぱりあいの横行があつて、かの清遊の会（学部学科を超えてのノンベの集い）にもヒビわれが生じていたからである。いつまでも亡靈かつぎではあるまいとの酷評はさておき、中心を欠いては、仲間と思っていた方々の離散、語らいの遠いさま等々は、当然とはいえ悲しいものである。無論、それが比較的楽な立場から責任ある立場におしあげられていった事実はある。当方としても、それなりの内部努力はしていた訳で、あの紛争時の同志感は薄らいで了っている。つまり、事実上離散している訳である。

教養部長職手当などインマイポケットすべきでないとの声もあり、多少の吐き出しにやぶさかではなかった。職種にみあうとか、収入の足しになどと少しも考えておらなかつたが、逆の何かもあるにはあった。

中には呆れたチクリがあり、調べて貰つてその事実がない事を確認したりした。筆者は部長在職時、部長室での食事とりよせなどしなかつたし、

ましてや飲むなぞ一度もなかった。執務室にあるのは、意外に気を使うものである。尤も仲間うちは時折り、個人研究室で会合をもったが、一人では一度もない。一方の旗頭の気取りはなかつたが、人とはよく会合した。潤滑油程度にしか思わなかつたのである。夏の暑氣払い、冬の年忘れ等々。中には豪傑もいて、ビールが足りない、食べ物がないとの広言もあった。多少の持ちよりを要請はしたが、飲みもの、食卓等、皆当方支度である。交際費は途中で使途を問はずになつたが、不快事あって、慶弔すべて自前で行ない、使わないのは逆に、いけない事なのだと指摘もあった。辛抱的では、実は近い学会を予想しての事であり、身辺等綺麗さの強調にあった。

それに学内の事情の説明も要しよう。

先述の大久保教授には二大協設立来、大いに手助けて頂いた。学会時の学生派遣に関して、自らゼミ学生指導に当つて下さり、御支援頂いた。何も同じ東大出身と云うだけではなく、そのことが人間信頼の回復であった。

現今の学生は、これは一本釣りを止めて集団把握で分つたことであるが、学会時、一日日当五千円、弁当付きは入試時より安く、加之、夏休み中（合宿がさまざまあり）の員数合せには腐心した。損得からすれば、単価が物を言い、実質上ではなかつた。大久保ゼミの学生には随分と御世話になつた。

当方、大学内ではフルテとは云え、そんなに近づき、親しみがある訳ではない。然しあの大学紛争の当り、教授会設営上（大学内ではめつたに開けず、都内を転々とした。当時の公選議長だったので、場所のこと、記録のこと等、事務局との接触繁く、食事のこと、深夜の帰りのタクシー手配等に、苦心した覚えがある。当時の電話代は毎月、二万位だったと記憶しているが、一切自費である。後に、学長補佐としての手当てはついたが、不足は素より手弁当である。上野のタカラホテルを基地にして詰めたりしたが、その中あるゼミ学生が現われて驚いたことがある。流石、都内ホテルでは警備が厳重であり、安心しておれたが）の連絡等あって、現在の事務局幹部とは懇意になった。

年度内中途で、就任した長佐古事務局長（札幌

二中五年後輩）には学会事務上のことやら、理事会等、大分大学にオンブさせて貰つた。又、課長クラスに教え子のあったことは本当に役立つた。事務局の具体的協力（印刷を始めコピー手配など諸般の）はありがたかった。それに筆者の夜行性が、同じ挙に出る共感を呼んだりである。普段の授業料、テキスト代のかさみは、思わず所で報いられた訳である。

何とかなるの不安定な確信は、たえざる危機感として、たえざる折衝をともなつた。事細かな指示は、前線と基地のズレを呼んだりもしたが、ま、大体において、のり出した舟は沈ませてはならぬであろう。これが同じ土俵の中におらせるのである。

これまで直接個人のことをまま、述べてきたのであるが、本来、学会に関しては特筆すべき方がある。それは前に述べた吉村教授の学恩、人徳、御寄捨等である。

通常、学会の公開講演は学会員内より選んでお願いするようである。筆者など、すぐに窪徳忠先生のことが浮ぶのである。あの富山大学での学会時、宿舎でのクボトク（まことに失礼であるが、外部の声である）と、ニエロク（仁戸田六三郎先生の俗称。いつも何か匂っていたが）のお二方の間に狭まって、かしこまっていた己れ。この絡みは壮絶であった。声の大きいのは腹に響く。

又、金沢の学会時、同宿させて頂いた平井直房先生。

それに東大の大先輩たる館熙道先生（優しいお人柄で、いつぞや君の大学を見たよと。それは謎かけにも似た響きだった）もおられる。迷いに迷つたのである。どなたにお願いするか、迷つた時には、話しさ振り出しに戻すのがよいと、筆者はかねがね思つていた。

然し筆者としては、長年の関心事である死の問題の事があり、ある所である高僧の死に方についての御話をうかがつた際（それは、おこがましくも、輸血、主の血・肉をのみくらうことに関わっていたが）に關していた。

委細は省くが、臨死での食事の拒否も又、決意した自殺行（生きることの拒否。他方ではまだ二、三ヶ月は生きられるのに落胆の余りと云うが）と

の御意見を知り、目が開かれたのである。その生はその死において、インテグレートされたものとしてあらわにされる。淡々と話された吉村教授の御言葉が忘れられぬ。従って若し、講演を聞くとすればこの先生をおいてなかろうと。

ターミナル・ケアに見る人間の問題、それは死の臨床例とも関わる。死の問題に関して該博な知識（死の事態をも含んで）をお持ちの方々がおられるとしても、この先生の御意見の開陳を、まとまった形では是非うかがいたいものと思ったのである。そして吉村先生を公開講演の講者にすれば、学会の諸氏にインパクトを与えるであろうと思いたったのである。死に方を回って、死の事態を通して与えられる図りしれない衝撃のことである。死の問題を回って、当方の提起した問題のことは略したい。

更に、学会講演当日には、医学と宗教のはざまの問題（それは医の倫理に帰着する）に関心をお持ちで、尚かつ、栃木県下でよく講演されておられる日野原先生（医大、気管食道科教授）をも御案内された。日野原教授の宗教一般に対する造詣の深さ、ネオ・デカルト主義の提唱等、医の倫理と宗教の関係への関心は、世のいわゆる聖職者への警鐘ともなろうものであった。真摯なる学者（医学のみでない意）である。

唯識等、先生から御教示を受けた筆者は何と浅学たることか、不勉強の至りである。

学会時、吉村先生と御一緒され、獨協学園理事長主催の、宗教学会理事懇談会にも御出席頂き、加之、平生の御感懐の一端を述べて頂いたことは、主催進行の筆者のみか御臨席の学会理事諸氏の胸に残る所でもある。アプローチの仕方は違っても同じ人間を課題としている訳であり、教わる所が多くだったのである。

学会成功裡には、御世話を頂いたもう一人の方をはずす訳にはゆくまい。

それは、緒方獨協学園理事である。氏の岳父は、獨協大学創立の立役者、関湊先生である。大学創設について世間では、かの天野貞祐先生とされるが、尤もその御声望なくては可能ではなかったにせよ、土地・建物・前々期の給料の支払い等、関理事長おわざずば不可能だった事実がある。委

しくは、『獨協大学創立二十年史』を参照されたい。筆者はその編集の長だった。創設苦心の裏話しが中にある。

正しく、オーナー理事長だったのである。一代の傑物だったと思う。

緒方氏はその関先生の御愛娘・裕子さんの御主人である。何と気取ることのない御夫婦であろう。緒方氏の柔らかさ（多分に強靭さと云えよう）、御心遣いは普段より承知している。従って、陰に陽に勝手なことを申し出、すぐさま受け入れられた。然も、表面に出られることをやんわりと退けられた、全くありがたい極みだった。中身は略。ただ徳とするばかりだったのである。尚、薦被りはさておき、日本宗教学会の名入りの枠の焼き入れば、関係者に特に無理を願った。

脇本先生は必要とあらば、どこへでも頭を下げに行くからとおっしゃったが、この吉村先生、緒方理事、お二方の援助はどんなに心強いものだったか。外に頭を下げずに済んだのである。学会終了当夜、教え子らと大飲し、独りに帰った時、窓外の明りに思わず涙したのである。ああ済んだ、終った、よくぞやれたものと。最大の武器は財政問題だったからでもある。運営は形而下とは言え、その中、金銭面での心配は先ずなしと。余程の見込み違いのない限り、第一次、第二次の印刷物にしても、出入りの業者を泣かせはしないが、値切って貰ったし、氏名票を除いて、ほとんど事務方にオンブした。学生の手配は別として、職員の出校は大学のオーバータイムとし、弁当も不要とされた。但し、後日にはささやかな御礼はしておいた。

大久保ゼミの学生、筆者関係のクラブ員、東大・京大の学生の協力参加の上に、本学の松丸助教授には実にうまく陣頭指揮の運営に当って貰った。東大の深沢助手の援けありとは云え、多くの運動員（社会人も含む）を手落ちなく当らせた。学会発表者の中には二、三十分前にプリントさせてくれという非常識もあり、コピー五千枚用意と配慮が当をえて、何とか処置しえた。

所で松丸助教授は、京大の上田閑照教授の御推薦により、来てまもなくだったが、前に京大での宗教学会運営の要として経験あり、微に至るまで

心配りしてくれた。上田教授には感謝の微意をよく伝えた。助かったものである。やはりありがたいのである。

ノンベでない彼にイチャモンつけつつ、ノンベの筆者は軌道をはずすまいと思った。意見のくい違いは最少限にとどめ、最大の協力を願った。ワープロの前に坐りこみのさまで、彼の腰痛の一端はこちらにありと思っている。ゼニ・カネのこととはさておき、諸雑務、これは彼なしでは多分に苦しみぬいたことであろう。学生動員は彼の指揮で成り立ったのである。アメラグの女子マネには經理を願い、本学の平岡職員にも最大限の御奉仕を願った。つまり、学会成立はこうした多くの方々の協力の賜物であり、筆者なぞ皆の廻りをうろうろ忙しそうにはい廻るだけだった。

学会本部の田丸東大教授には、随分と御協力を頂いた。実務的ではない当方のズサンさには、内心呆れられたと思うが、そこは長年のキャリアーが物を言う、東大の研究室訪いのあと周辺でも馳走によくあずかった。時には宗教学研究室の昔話など尽きざる興があった。御同行された脇本教授は、もう安心されておられるようだった。

さて結末へと急ごう。

公開講演の行われたのは、中央棟三階・大会議室。吉村教授は、euthanasia の問題提起から、スライドを多様に用いられて、量子論的生物学的図式へと論を進められた。バクテリア・オファー

ジュの所は面白くうかがわせて頂いたが、数式には（その数式も、量子論関係では常識の）手を焼いた。幽霊の話し、氷った金魚の解凍後の動き、光波としての運動エネルギー、曲った直線等に、背理も含んで、ついてゆける所までついて行こうと。特に human と person の話しは、身体と人格（心）の問題であり、死の事態を回っていろいろと考えさせられるものがあった。特に吉村先生の御了解をえて、公開講演ではまれな質疑応答を行なった。

イヤハヤ、われわれ人文系の者にとって驚きでしかなかった。この講師にお願いして大成功であった。イムパクト以外の何ものでもない。

研究発表会には、普通出席することのない本学の安本学長（彼は講演時も熱心に聴講した。学会は普通、当該学部長の出席）が挨拶に立ち、爾後、プログラムに従って進行した。最初に申上げた通り、御同慶の至りである。会員懇親会では酒があり、個人研究室に運ばせた所、フロアが大半をすすってくれた。後に、酒の匂いがプンプンすると揶揄された。

終了当夜の深更の月、そのにじんだ光りの色は生涯忘れられないであろう。関係各位にただ謝するばかりであった。

追、朝日新聞よりの記者取材があり、学会直前に紹介された事実だけを記しておきたい。尚、個人名については御許し頂けるものと信じて。